

## (特別) 音楽鑑賞会 (7月28日 紀尾井ホール)

## 国際アマチュアピアノコンクール

令和元年7月28日(日)異常に遅い梅雨明けが宣言された日、猛暑の中、紀尾井ホールに赴いて、特別音楽鑑賞会、「国際アマチュアピアノコンクール」を楽しんだ。

日壇文化協会が主催し、杉並区、オーストリア大使館、などの後援、協賛をえて、今年第14回を迎えたもので、東京、大阪での一次予選、東京での二次予選を経て、本選に出場された、アマチュアのピアニストによる競演である。

A部門(すべて暗譜)45名、B部門(視奏可)65名、シニア部門(55歳以上)29名のアマチュアピアニストが第一次予選に参加されている。

その中で、A部門10名 B部門9名の方が本選に出場され、競われた。

シニア部門は一次予選が本選を兼ねており、そこで入賞された3名の方が、紀尾井ホールにおける「入賞記念演奏」をされた。

最後に、2018年度のA部門第1位入賞者が、ブラームスの「左手のためのバッハのシャコンヌ」と村松崇継の「いのちの歌」を演奏したが、圧巻であった。

このコンクールに参加できる「アマチュア」の定義は、18歳以上の経歴で音楽の専門教育機関で学んでいないこととなっている。

本選出場者のプロフィールをみても、医師、医学生、技術者、公務員、教師、会社員、専業主婦、子育てと仕事に奮戦する主婦、・・・と多彩である。

仕事と同じように、音楽を、ピアノを愛していることが、出場者のプロフィールに示され、そのことが、演奏を通して、ストレートに感じられた。

演奏された曲は多彩であり、ショパン5曲、リスト2曲、スクリャービン3曲、のほかは、ベートーヴェン、シューベルト、シューマン、チャイ

コフスキー、フォーレ、ヨーゼフ・シュトラウス、デュティユー、日本人の作曲家などの多くの作曲家の作品が1曲ずつ。聴きなじんだ曲もあったが、はじめて聞く曲も少なくなかった。

シニアの3名の曲は、ハイドン、ブラームス、バッハの曲であった。

B部門から始まり、短い休憩の後、B部門の後



半、昼食休憩後、A部門の前半、短い休憩後A部門後半というハードな時間配置であったが、それぞ

れに個性豊かで、アマチュアと思えないレベルの演奏を披露されていた。

お仕事、学業、家事などの時間をやりくりしながら、寸暇を惜しんで長い日数をかけて作り上げてきた自分の音楽を、紀尾井ホールという最高のホールで、全て放射してしまいたいという思いが、ひしひしと伝わってきた。それを、聴き手として受け止め、一緒に音楽するという、得難い時間を頂いた。

審査発表までの時間が相当長かったが、なんと



A部門が第1位三名ということで、2位、3位がない、ということであった。優劣付け難く・・・ということなのでしょう。



辛島輝治審査委員長の講評が、興味深かった。



出場者の演奏技量については、その練習の成果、熟練度を、十分評価されながら、

微妙な表現をされた。

『高難度の曲に挑戦し、それをきちんと弾ききることは、素晴らしいことと感じるが、ほんの少し



難度の低い曲を選び、ピアノと語り合い、音楽の心を伝えてくれることを、心がけてくれたら・・・。』

この催しをご紹介して、聴いて頂いた方の感想を、いくつか頂いた。

- \*意欲的、個性的な演奏を楽しませてもらった。
- \*国際ということだが、出場者はすべて日本人でしたね。
- \*競うということからやむを得ないことかもしれませんが、高難度曲への挑戦という勢いが強く感じられ、もう少しのびやかさが感じられれば・・・。

\*スタインウェイの最高グレードのピアノ、紀尾井ホールという最高の場、それにひたむきに向かう、まさに「アマチュア」ピアニストの真摯な演奏に深い感銘を受けた。

小生の、素人としての感想も同様に、辛島先生のご講評に、うなずくところがあった。

6時間近い長丁場で、聴くにあたって、緊張感を保持するのは結構大変である。客席は、休憩時出入り自由であるが、空席が目立つ状況であった。

夏休みということでもあり、音楽に興味があり、とりわけピアノのレッスンをうけている中高生に聴いてもらおうと、大きな刺激を受け、音楽への熱意が高まるだろうと思った。

アイアン・クラブ会員、ご縁のある方のご子弟で、ピアノに興味のある方がおられれば、大いにお勧めできると思う。2020年は9月26日(土)、紀尾井ホールで、本選が予定されている。

アイアン・クラブ会員ご家族のご参加は3名であった。  
(白神 賢志・記)

